

フランド  
シュタイン



ネグロニカ

残念。  
死んでも終わりではありません。

——永い後日談のネクロニカ



「おーい、誰かいるかあー!?」

ドアを叩き割らんばかりの轟音が我が家を襲ったのは、丑三つも過ぎた真夜中の事だった。

ノックと呼ぶには憚られるほどの馬鹿力で蝶番をへし折らんばかりにドアが撓み、ひしゃげて揺れる。私は揺れるガス燈の灯りを大きくし、顔をしかめて作業台の図面を閉じた。

「いーなーいーのかー!? いらないなら返事をしろおー!!」

……幻聴の類では無いようだった。

時刻を抜きにしても来客の予定はない。こちらの予定も考えずに突然やってくる来訪者には一人心当たりがあるが、当の彼女は数時間前に簾ごと外に叩き出したところだ。

そもそも私が瘴気立ちこめる魔法の森に居を構えているのも、 unnecessary 交流を避けるためだ。私の魔法は私の願いを叶えるためにだけあるのであつて、どこかの野良のように揉め事解決やら作成依頼を受けるような看板を掲げた覚えはない。

何よりも、鼻先を掠める濃い血と鉄の匂い。……控えめに言

つて、友好的な相手とは思えない。

「いないんだなあー!? じゃあ勝手に入るぞー!?」

ドアノブがぎちぎちと軋み、分厚い樫の扉が悲鳴を上げ始める。紅魔館の図書館ほどではないにしろ、この家は魔法使いの工房として十分な強度を持たせてある筈なのだが、ドア向こうの相手はそれを力づくでこじ開けようとしているようだった。

世にいう魔女狩りの時代はこんなものだったのだろうかと考えながら、人形達に魔力糸を接続。符名の宣言は省略し、糸を通じて人形達に命令を下す。

ばきん。蝶番がはじけ飛ぶのと同時、クローゼットの扉を跳ね飛ばして展開した人形達が、一斉に手にした長槍をドアへと突き立てた。

無数の穴を穿たれて、木端微塵に壊れたドアの向こうにあったのは、串刺しにされた不埒者の姿——ではなく。

「おおー!?」

ぴんと伸ばした手を振り回すようにして叫ぶ、ひとりの少女。身につけているのは大陸風の紺と赤の忌装束。ぞろりと生え揃った牙の間から冷素を吐き散らして、激んだ眼がざろりとこちらを睨む。その身に纏う濃い死臭で、土気色の肌と額に貼られた大きな符を見るまでもなく、彼女が死体なのだと分かった。

「おおー!! お前があー、森の人形遣いって奴だなー!?」

「……あなたは？」

「うむ！ 我こそは、偉大なる大祀廟を守るために生み出された不死の戦士だ！」

……宮古芳香。

身体の前に突き出した両手を誇らしげに振り上げ、少女はそう名乗る。

「お前は腕のいい修繕屋だと聞いたぞ！ だからいますぐ私を直してくれ!!」

「……はあ」

割と予想外の発言に、私は胡乱な表情を浮かべずにはいられなかった。



——三魂<sup>ミタマ</sup>天に帰って、七魄<sup>ハツバク</sup>地に帰らざれば、以って鬼<sup>キ</sup>となり僵尸<sup>キョウシ</sup>と成る。

仙術によって作られ使役される動く死体を僵尸<sup>キョウシ</sup>と呼ぶ。死体の運搬の面倒を省くために歩かせたのが始まりともされ、特徴としては『僵<sup>こわばる</sup>』の字義どおり、死後硬直で曲がらない関節

が挙げられる。西欧での吸血鬼としての性格も持ち、殺した相手と同族にしてしまうこともあるという。

霊視を試みれば、彼女の霊息<sup>レイシ</sup>は確かに黄色。死<sup>アン</sup>に損<sup>アツド</sup>ないであることは間違いないようだった。しかし生憎と私の知り合いに生粋の死霊術師<sup>シレイジュ</sup>はいない。

こちらを害する意図がある可能性は捨てきれず、訝る私を余所に、彼女——芳香はずだん、と飛び上がり、訴える。

「頼むぞ！ このままじゃご主人様のお役に立てないのだ!!」  
見れば確かに、彼女の体のあちこちには損傷があった。片方の腕は明らかに腱が切れているし、右の腿などは太い枝が突き刺さったまま皮膚が大きく裂け、傷痕が腐敗して骨まで露出している。腹にも大きな傷があり、そこからはどす黒い腸がはみ出しかけていた。かなりの長い期間、補修を受けないまま放置されているらしい。

警戒は緩めないままに観察していると、ばたばたと飛び跳ねていた彼女がいきなりがくと膝から崩れ落ちる。

「お？」

横倒しになった頭がテーブルの角を強打。ベきりと嫌な音を響かせて首が180度ねじれ、頭蓋が地面を跳ねる。

「うわあ——！ また折れたあー!？」

へし折れた左足と首を見下ろして、彼女はきょとんと瞬きを繰り返してから、まるで他人事のように叫ぶ。

膝が反対側に曲がって、靱帯と骨の一部が露出していた。痛覚がないのは分かるが、正直、あまり注視したくないものでもない。

折れた脚にも構わずに尚も立ち上がりとうしてまた転び、じたばたともがく。転がりまわる元気な死体がぶつかるとにテールブルが揺れ、柵の中身が床に散らばる。

私はたまらず叫んでいた。

「……ああもう、暴れるのやめなさい！ 直るものも直らなくなるわ!!」

次第に頭痛の強まりだした額を押さえて吐息する。これ以上工房を荒らされてはたまらなかつた

「解ったわ、直してあげるから、おとなしくして!!」

「本当かー!？」

問い返す彼女だが、懐疑を抱いているというよりは確認をしているような語調だった。相手を疑うという機能まで排除してシンプルに出来ているらしい。

大きく裂けた胴体から、生命維持に必要な臓物をするとこぼし、肩と膝を使つてずるずると地面を這い進もうとする彼女を、人形で抱き上げる。

「お？」

「直りたいなら無茶はやめなさい」

諦めと共に言い聞かせながら、床に散らばった臓物も回収させ、まとめて腹の中に押し込む。作業をこなした人形達がたち

まち腐汁に塗れ、見るも無残に汚れていく。

後の面倒に頭を悩ませる私の内心を知つてか知らずか、彼女はけらけらと笑い声を上げた。

「おー。お前はいいやつだな!! この前あつた奴らはいきなり撃つて来たのに!!」

「……客として来るのなら歓迎するわよ」

皮肉のつもりだが、通じてはいないだろう。

礼儀のなっていない相手には相応の対応をしているだけだが、どうにも魔理沙あたりはそれが不満であるらしい。心外だ。

修復とは言え、人形作成用の工房に医者の真似事ができるような設備はない。とりあえず地下の作業室に彼女を運び、一番大きな作業台に除染用のシートを引いて横たえる。

袖付きの作業エプロンに着替え、呪詛感染を含むための防護の魔法を施した手袋とゴーグルを嵌める。並大抵の毒や病気などで弱る身体ではないつもりだが、死者をキョンシーとして動かすほどの呪詛に素手で触れる気にはなれなかつた。

折れた脚と散らばった内臓を並べ、私は彼女の顔を覗き込む。「ねえ。できれば修復中は動作を止めて欲しいんだけど……」

「？」

首を傾げる彼女。ご丁寧なことに額の符にも【?】の一文字が浮かび上がる。言うだけ無駄かと諦め、マスクをしながら言い聞かせた。

「もう一度繰り返すけど、あまり動かないで。あなたの身体の勝手が分からないんだから、ちゃんと直して欲しかったら私の指示に従いなさい。いい？」

「おー。わかったぞー」

額の符が制御系になっている可能性は十分に考えられたが、術式への干渉を考えて手を出すのは自制する。となると、多少強引で原始的な方法に頼らざるを得ない。私と同じように作業を着せた人形たちを一ダース配置して、修復を開始する。

まずは彼女の首にノコギリを押し当て、折れた首関節の接続を切り落とした。頸椎を外し、古い縫い痕のある皮膚を切除。神経を切り、首を脊髄ごと引き抜いて隣の架台へ移す。

「おー……」

黒く汚れた血を垂らしながら、ずるりと伸びる自分の背骨を見下ろしてキョンシーは感嘆の声をあげる。生身であればたとえ痛覚がなくとも精神への影響は免れず、最悪発狂してもおかしくない筈だが、彼女は全く堪えた様子もない。死体にまともな精神など期待しても仕方のないことではあるが。

「そうだ！ ついでに腕も曲がるよーになると面白いな!!」  
彼女がキョンシーであるなら、関節の固定は死後硬直によるものだろう。しかし彼女の死はおそらく昨日今日のものではなく、数十年……ことによると数百年単位で過去のものかと思われた。それだけの年月を過ごしたのであれば、とつくに四肢の

硬直は解けているはずなのだが……

何らかの方法で腐敗の進行自体を停止させている可能性があると考え、まずはその保存式の解析から始める。

「ちゃんと柔軟体操もしてるんだぞー!?」

「はいはい、分かったからじつとして」

子供をあやす気分でしたがたとえ作業台を揺らす彼女をなだめ、損傷部分を覆う皮膚と肉を切開。固定の後に動作と欠損部を確認してゆく。彼女が死体でなければどんな名医でも手に負えない大手術だったろうが、幸いにして彼女が動いている理由は生命があるからではない。雑菌の感染や組織露出に伴う変質を気にしなくて良いのはありがたかった。

予想通り、彼女を動かしている術式そのものは実に単純だった。半時間にもかかわらずに大まかの構造を把握することができた私は、把握針と糸を縫製用の籠ガネット手ミシンに繋いで、直接折れ千切れた手足と内臓を縫い合わせてゆく。

その過程で、彼女の素材になった死体は一人分ではないことも判明した。基になった死体こそあるものの、複数の『素材』を集めて繋ぎ合わせた死体の合成品とも言え、敢えて分類するならば死に損デッドないではなく、屍人ゾンビ形アスペクトと言うべきなのかもしれない。

その観点から見れば、彼女は実によく仕上がっていた。陰気の溜まる場所では、普通の死体がキョンシーになることも無い

わけではないが、彼女のような精巧な屍体人形が、自然に生まれることはあり得ない。

「ねえ。あなたってどこに住んでるのかしら？」

「うむ、墓場だ!! そこで大切なものを守っているのだ!!」

墓場に死体があることそのものは（動いている点が多大にイレギュラーだが）別段おかしくもあるまい。問題は、それを命令した相手の存在だ。

「あなたはそこにいろ、と命令されたのよね？」

「そうぞおー!! 我等はたとえ最後の兵となろうとも、あの大祀廟を死守しなければならないのだー!!」

「もう死んでいると思うけど。……誰から？」

「む。それは話せないぞー!! なぜなら秘密だと言われているからだ!!」

「……そう」

彼女の主人と言うのが誰だかは知らないが、死体を材料に人形を作るといのはけして間違った方法ではない。そも、人の形を模したものが人形であるならば、人間そのものを材料にするのが一番相応しいことになる。

「……参ったわね」

思わず苦笑が漏れる。彼女には自我も意志もあるが、魂がない。動き考え喋るだけの、ヒトガタだ。

生前の自我は喪われ、自分が死体であることは理解しており、

その上でなお現在のキョンシーとしての自我を確立している。主人の上位命令権こそ残されているのだから、私を訪ねて修理を要求するほどの自由意志を持つ。

つまり、彼女は私の理想とする完全自律人形にきわめて近い存在なのだ。

「おぉー？ なんだお前らー？」

それを証明するように、ぶらぶらと架台の上で身を揺る彼女が、器具を運んできた人形達に話しかける。どういうわけか、彼女は人形のいくつかと思疎通を可能にしているかのように振る舞っていた。

「私の人形達よ。あなたを直すのを手伝ってもらうの」

「ほぉー？ 偉いなー？」

興味深げに人形達を覗きこみ、彼女は作業台の上の身体を動かして、器用に人形の頭を撫でる。どんな術式なのか、物理的な接続を断つても、彼女の脳と身体は繋がっているようだった。

（……………）

一瞬、このまま彼女を解体して、その仕組みを徹底的に解析したいという好奇心が頭をかすめる。それは魔法使いとしては実に正しい行いと思えたが――

「そうかー、お前もご主人様のために働いてうれしいのかー」

人形たちから何かを聞き取ったのか、脊髄を尻尾のように振り、生首だけで笑う彼女。……いや、もう『生』首ではないか。

人形たちと話している（？）彼女を前に小さく首を振り、私は胸中に沸き起こる暗い疑念を押し込めた。

修復は予想以上の大作業となった。補修作業自体はさほど複雑なものではないが、もともと屍として意味を持つていた彼女の身体に、セルロイドやワイヤーと言った人工物を用いた場合、彼女を維持している術そのものにも影響を与えかねない。必然、修復に使える材料は限られ、そのために私はストックしていた生体材料——腱や骨、筋肉など——の多くを放出しなければならなかった。

骨を継いで腱を張り替え、肉を詰めて皮膚を当て縫い、神経を縫り合せて紡ぎ——精密作業用の人形五体とその補佐の七体を総動員して、約四時間。そろそろ空が白み始める時刻となつて、ようやく彼女の補修は終了した。

「はい、おしまい」

「おお、動くぞー」

十全な状態の彼女がどんなものかは知る由もないが、人形遣いの矜持にかけて、ほぼ完璧な修復だったと自負して良いだろう。すっかり自慢のお肌を取り戻した動く死体は、上機嫌に腕を振り、軽くなった身体を堪能している。

「ボランティアもほどほどにして欲しいわ。次からは修繕費用を請求するわよ」

「そうかー」

わかつているのかそうでないのか、頷くキョーンシー。人形にして十数体分の素材を惜しみなくつぎ込んだのタダ働きとは。あまりに割に合わない取引だった。

またぞろこれら『材料』の供給を紫に申し出なければならぬことを考えると、気が滅入る。

「これでまたご主人様の役に立てるなあ!! 感謝するぞー」

再び彼女の口から出たご主人様、という言葉に、私は少なからぬ興味を覚えていた。これほどの人形を作る技術に巡り合ったことは数えるほどしかなく、彼女の主に会える機会があるのならば看過できない。

件の大霊廟にまつわる一連の騒動は、魔理沙の自慢話で耳にしている。この国の古代の為政者が蘇り、物好きにも博麗神社の地下に洞府を開いたなどと言う話だったか。

恐らく、彼女の主とやらもその関係者であろうことは推察できた。

そして彼女が、その主からも用済みとされていることも。

彼女の主が本拠地を移したのなら、いまさら墓地を守る理由もない。それにも関わらず彼女に与えられた命令は、変更されていないのだ。『僵尸』と呼べないほどにまで腐り崩れてしまった身体も、それを窺わせていた。

複雑な気分で見ている私の前で、彼女はすっかり血色（？）を取り戻した青白い肌を誇るように腕を突き出し、額の符をは



ためかせて、口元に牙を覗かせる。

「色々世話になったなー、アリス！」

「……あまり無茶はしないようにね。いつでも直せるわけじゃないんだから」

「おおー、承知したぞー」

無駄かもしれないが、一応釘をさしておく。修復に力を尽くした以上、できれば長く無事でいて欲しいというのは本音でもあった。

「じゃあなー」

夜が明ける前に戻らねばならないという彼女を玄関で見送る。森の奥へと消えてゆく屍人形の背中と、凄惨なまでに汚れ、死臭の染み付いた工房と人形たちを見回して——大きく吐息。

私はシャワーを浴びてから、眠気覚ましの紅茶を用意することにした。



「——そういやアリス、知ってるか？ 里で大勢人死にが出るそうなんだが」

そんな騒ぎから、十日ほどが過ぎた日の事だった。

いつものように人妖が集った博麗神社の一室。炬燵の上には湯気を立てて煮立つ土鍋が揺れ、燗酒と杯が並ぶ。

先日借りた資料を返しに顔を出した図書館で魔理沙に捕まって、神社まで連れられ——気付けば時刻は夕方を過ぎ、なし崩しの宴会が始まっていた。

神社に妖怪が屯<sup>た屯</sup>することに常々不満を持っている霊夢も、食物と酒が出てくるとあればそう悪い顔はしない。何かと物入りな歳末の時期に紅魔館の主従がともども、食糧持参でやってきたのだから、これは彼女の作戦勝ちというところだろうか。

そうして設えられた鍋も佳境に入り、腹を膨らませた参加者一同が、酒精に酔いを回らせている中、魔理沙が話を切り出したのだった。

ここ数日、人里で人死にが続いていると。

「——なんでもな、腕が見つかってないらしい」

「食事時にする話じゃないわね」

犠牲者は皆、見るも無残に全身を引き千切られた姿で見つかり、その惨たらしさは直視できないほどだと言っ。

殊更に恐ろしい顔と声で囁くように言う魔理沙に、霊夢は呆れて箸先を口へと運ぶ。折角披露した怪談がウケないのが不満なのか、白黒の魔法使いはふんと鼻を鳴らした。

「一昨日で四人。ああ、今朝もう一人襲われたって話だから五

人か。若い娘ばかり狙うつてんで、嫁入り前の娘を抱えた家は  
大騒ぎって聞いたぜ」

酒精に濁った後ろ暗い笑みで、いやあ我ながら親孝行もんだ  
ぜ、と魔理沙は囁く。おそらく冗句<sup>ジョク</sup>のつもりなのだろう。彼女  
が人里にある実家と疎遠であるという話は折々で耳にすること  
だが、愚痴に混せて吹聴される言葉の端々から、さして深い事  
情があるわけでもないというのはなんとなく想像ができた。

本当に話したくない出来事というのは、言葉にするのも  
忌々しいもののなのだが。

「まあ、掻い摘んで言えばだ」

鍋の底に残った白菜と白滝をすくい上げて自分の器に移し、  
遠慮なく咀嚼しながら、魔理沙は箸先を鰯の干物が乗った皿へ  
と向ける。綺麗に身のすくわれた干物の、骨と皮だけになった  
身体を器用に半分がちぎり、

「喰われちまつてるらしい。……ああ、別にいやらしい意味じ  
やないぜ？」

犠牲者が若い娘で、夜の出来事となればそんな連想もあるだ  
ろう。だがこれまでの話を聞いている限りでそんな詰まらない  
オチでないことは明白な会話の流れの中で、敢えてそんな表現  
をするあたり、魔理沙も相当酔っているのだろう。

少しだけ身の付いた干物の皮をばりばりと齧り、温くなった  
手元の杯を開ける。

「物盗りだ辻斬りだつて話じゃないらしいんだ。つまり、態々  
殺そうとしたんじゃないく、ついでに殺しちまつたんでもなく、  
結果的に犠牲者が死んじまつたつてな。こいつは、単に襲った  
やつを喰おうとしただけらしい」

「普通、食べられて生きてる奴はあんまりいないと思うけど」  
「そうでもないぜ。世間は広いからな」

なぜだか訳知り顔の魔理沙の向かいで、レミリアが至極<sup>もつと</sup>  
もだもばかりに頷いていた。どうでも良いが、片手の赤ワイン  
が鍋に合わないこと甚だしい。

「まあなんだ。仮に私達がこの白菜だとするだろ」

「せめて動物にならないの？」

「それはもう少しここに動物性蛋白を並べてから言うといいと  
思うぜ？ とにかくだ。私やお前が白菜だとする。こいつらは  
今朝まで畑に植わつて、充実した人生を送ってたわけだが、そ  
こをいきなりざつくりばつさり、鎌に根こそぎ刈り取られて、  
全身縮みあがるような冷たい水ぶっかけられたかと思っ  
たら、気付いたら重ねて四つ八つに切り分けられて、しまいに  
や釜茹でだ。だが、私は別に、白菜を殺そうなんてしてない。  
単に美味そうだったから料理して、喰っただけだ」

「料理したのは殆ど私だけだね」

口を挟むと、魔理沙は流石に不快そうに眉をしかめる。何度  
も腰を折られて機嫌を損ねたのだろう。子供っぽい拗ねかただ

と思いはしたが、実際、魔理沙が音頭を取らなければこの鍋が  
でき上がっていなかったのも確かではある。

「今回の事件もそうらしいんだな。どうも襲った奴は、襲われ  
た奴が喰われたら死んじまうってことも考え付かないくらいの手  
合いらしい。ただ腹が減ったから、齧りついただけなんだ」

「その結果、相手が死ぬことにも気付かないまま？」

随分と、乱暴な話だった。

しかし確かに犠牲者の有様を聞く限りでは、魔理沙の話は頷  
けるところが多い。事件現場の凄惨な光景と言い、事切れた娘  
の傷口——魔理沙の言葉を借りれば、齧り痕か——は、少々常  
軌を逸していた。狩りの経験のない若い獣でも、もう少しまと  
もに仕留めるだろう。

骸のなっていない悪餓鬼が、腹を空かせて上等なケーキを食  
るように、犠牲者の身体は手当たり次第に噛み千切られていた。

「そんなので良く解ったわね」

「なにがだ？」

「手よ、手」

ぶらぶらと右手を振って見せる霊夢に、魔理沙はああと手を  
打った。もともとこの話を始めたのは彼女の筈なのだが、それ  
も忘れていたらしい。大分酒精を回らせた様子で、これは明日  
は昼過ぎまで二日酔いで呻いているだろう。

そう。手。手が見つかっていないというのが、そもそもの主

題だった筈だ。

「そこで今日の犠牲者の話になるんだがな」

重々しく話し始める魔理沙だが、内容にはさしたる違いはな  
かった。夜遅く、出歩いていた娘が正体不明の何かに襲われ、  
凄まじい力で押さえつけられて右手を齧られた、ということに  
なる。幸か不幸か、連日の猟奇事件に里の警備が嚴重さを増し  
ていた事もあり、彼女は三途の河へ渡るほどにまでは齧り続け  
られなかったということになる。

それでも——どうにか人の形は保っていたとはいえ、その重  
症で命を繋ぎ止めたのが奇跡と見るべきだろう。たまたま朝早  
くから現場に永遠亭の薬師見習いがいたというのは、まさしく  
天の巡り合わせだった。人里へ薬売りに来る二匹の兎のうちの  
片方は、四十枚葉のクローバーを見つけるくらいには人間を幸  
運にする程度の能力を持っていると常々喧伝している。

「ってわけだぜ」

「ふうむ」

珍しく考え込む霊夢。

四人の死者——いや、今朝の犠牲者も勘定に入れば五人。  
立て続けに喰われた彼女達は、等しく右腕を失っている。そこ  
にどれだけの意味を見出すかという見立てだった。五人の被害  
者の連続性は、細い糸の可能性を見出すにも、ただの偶然と片  
付けるにも微妙な数で、それ故に明瞭な判断には物足りない。

たまたま、妖怪が食べ散らかした残りに右腕が含まれていなかったという可能性も十分に考えられた。

「ねえ、魔理沙」

ふと、霊夢が顔を上げる。自分の振った話だというのにすっかり忘れ、囲炉裏の傍でにとりの持ちこんだ機械を覗き込んでいた魔理沙は急に名を呼ばれ、呆けたように振り向いた。

「その襲われた子って、なんでそんな時間に外にいたの？」

「なんでって——」

そんなの決まってるだろ、と言わんばかりに唇の端を歪める魔理沙。何がどう決まっているのかは全く分からないが、この酔っぱらいの中では、とつくにそこについては話した積りになっっているようだった。

「客だよ、客」

「？」

疑念を浮かべる霊夢の横で、レミリアが何故、たか満足そうに口元から牙を覗かせて笑う。巫女の隣に寄り添った彼女は、傍らのメイド長に視線で促した。いつでも完璧な彼女は、デザートの蜜柑を剥く手を止めてさりと口にする。

「商売の最中だったのでしょうか？」

「……ああ」

霊夢が眉をしかめ、嫌そうに呻く。博麗の巫女の見せる潔癖な一面に、私は少々驚いていた。あまりそんなものに頓着する

性格とも思えなかったのだが。……否、穢れを払う巫女であるならば当然の事なのだろうか。

人里には古くから遊郭があつたが、最近では歓楽街の一角としてそれなりの賑わいをみせているという。一昔前までは、里でも夜這いやお手付きなど良く見られたようなのだが、里の教育者ともいうべき半人半獣の教師が数十年にわたって根気よく道徳と性風俗の乱れを説いて回った結果、より健全な娯楽として確立され、隔離され、現在のような歓楽街が出来上がってしまったらしい。

今回犠牲者となつた若い娘達は、こうした廓にも属していない、夜辻で客を引くような、上等とは言いがたい部類の者たちだったのだと言う。

「……だから、あんまり騒がれてないんだな」

むしろそれを歓迎している者の方が多いのかもしれない。犠牲者の多くが表沙汰にし辛い身の上であるということを含めて、広く公にされるよりも、後ろ暗い興味と共に、尾ひれを付けた噂として持て囃される類のものだ。

それゆえ、人里と交流の遠い博麗神社には、少しばかり伝わるのが遅れたのだろう。

「思わぬ切り裂き魔の出没ってことね」

「うちのメイドはそんな偏った食材を出すような出来ない真似はしないよ」

レミリアが自慢げに言う。これで従者の質を褒めているのならば彼女にもいっぱしの大妖怪としてのカリスマが備わっているのだろうが、実際は単にそんな従者を持っている自分を誇っているだけなのだから、隣に腰を下ろす咲夜の苦労たるや相当のものであろう。

いずれにせよ、吸血鬼の館に運び込まれる食料は、多く丁寧に選別された上等なもので、食卓に並ぶ時も贅を尽くして調理されている。見境なしに齧りついた死体の、余りの腕だけを持ち去って主の前に転がして尻尾を振るような駄犬では、そこそそ縊り殺されるほどに不興を買うことは考えてみるまでもない。ちらりとうかがった視線の先で、咲夜は顔色一つ変えずに鍋のベとなる雑炊の用意を始めていた。



その後、天狗を伴ってやって来た早苗達が騒ぎ出したため、話の主題は血生臭い人里の不幸から、年明けの宴会へと移り、その話はどこへともなく追いやられてしまった。

もともと珍しいような話でもない。里の人間に犠牲者が出る

のは、日常ではないにしろ特異なことでもないのだから。

大方、今回の被害もどこかの妖怪が行儀悪く食べ残したのだろうということになった。

しかし、そこまで凶悪な妖怪が、好んで人里に出没するというなら、それは確かに異変とも呼べる。早苗はさっそく明日からでもその解決を始めるのだと息巻いていたし、魔理沙も霊夢を引っ張り出す腹積もりのようだった。

「とくに早苗なんかは喰われないように注意しろよ？」

「失敬な。私は平気ですよ！」

魔理沙も早苗も、霊夢でさえも、みなこの妖怪を人喰いと評していた。実際に襲われた死体の咬み跡から唾液まで検出されたとなればまず間違いない話かもしれないが、私には些かそこが腑に落ちない。

要するに、妖怪にとつて人間のうちどこが一番美味しいのか、という理屈だ。

至極単純な話だが、妖怪は習性として、あるいは食料として人を喰らう。多くの妖怪は決して人を喰う事なくとも生きていけるものだが、敢えて人食を止めている妖怪というのは少ないものだ。妖怪が人の畏れに根ざした生き物である以上、人間達に恐怖を忘れられる訳にはいかない。

対照的に、恐怖心そのものを食べる妖怪ならば、人間……人肉それ自体には見向きもしないこともある。人間を怖がらせる

ことで腹が膨れるのだから、これほど効率のいい話はない。最も驚かされる人間にしてみれば溜まったものではないだろうし、そのショックで寿命が縮まったり、ぼつくりと逝ってしまう可能性もあるのだから、彼らもまた間接的に、人間の命を喰らっているのである。

さて、人食が義務や習性であるにせよ、人は妖怪にとって決して不味いものではない。腹が膨れるのだから当たり前ではあるが、なんとも効率よくできているもので、妖怪にとって美味を覚えるのは、人間の『命』の要素が濃い場所になる。

頭なら脳髄、<sup>はらわた</sup>臓腑ならば肝や心臓。腕や脚は筋張っていて骨も多く、あまり好まれない。多少趣味が混じるが、舌や眼、髪など、人間が人間である特性を持つ場所が珍重される場合もある。また、生贄に幼い子供や赤子が好まれるのは、一人の人間としての命がそれだけ小さな身体に凝縮されているからだ。吸血鬼などはその最たるものだろう。血を媒介に命の蓄積とも言<sup>エッセンス</sup>う霊髄を吸るのだ。

ついでに言えば、女怪が男の精を好むのもこの理屈に近い。たまに妙な憧れと幻想を抱く若者が出るものだが、彼等にしてみれば興味であつても、相手にしてみれば食欲である。迂闊に関係を持つと、赤玉が出るまで嘔り絞り取られるのが関の山なので、興味本位で軽々しく近づく事はお勧めしない。以前、私の所にも同じようなことを考えて訪れた男が辿った哀れな末路

についても申し添えておく。

……話が脱線した。いずれにせよ、食べる場所に意味があることは、獣でも変わらない。

獣が仕留めた獲物の腹から食い破るのは、そこに一番栄養が蓄えられているからだ。欲望を素直に表現する彼等は、わざわざ一番美味しいものを後回しにする様なことはしない。野生の中では食欲も性欲も一番乗りになこそ意味があり、謙譲の美德などどこにも存在しないのだ。

無論、奪い合う相手にいい所を横取りされたり、餓えているならば手も足も食べるだろうが、臓腑だけを存分に喰って腹を満たすことができるなら、手足になど見向きもしない筈だ。

人里での犠牲者の数と頻度を考えるに、数日に一人を食らわねば飢えてしまうような妖怪がこれまでにいたら、とうに人里は滅びているだろう。ここ最近幻想郷<sup>ちやう</sup>にやってきた妖怪であるというなら解らなくはないが。

つまり。人喰いの妖怪が、頭や体を残してゆくというのは、少々理屈がつかないようにも思う。彼——彼女かもしれないが——にとつて、手が一番美味なところだと考えれば疑問は大分薄れるが、それでも違和感が残る。

むしろ、手を好んで食らう事に意味を見出す妖怪というなら、それは人喰いとは少し意味が違うのではないだろうか。

「……………あら」

食事中の闇妖に出くわしたのはそんな事を思いながら飛んで、行き過ぎた道に戻る途中のことだった。

「アリスなのかー？」

最初は弾幕になるかと覚悟したが、彼女はあっさりと周囲の闇の濃度を緩め、姿を現す。また幼い少女の姿をした彼女の口元は、どろりと凝った赤黒い血でべたべたに汚れていた。

今日の得物は野犬らしい。飼い犬はともかく野生に戻った犬は里の人間にとっても厄介なもので、黙認——というよりは積極的に食べて欲しいという里の意向なのだとのこと。

しかし、彼女にしてみれば一抱え程度の痩せこけた獣など、腹を満たすにはとても足りないもののようなのだ。

「んー？ 人間？ 最近はあるまり食べてないなあ」

口の周りを真っ赤に染め、ばりばりと得物の骨をかみ砕いて飲み込んだルーミアは、首を傾げて答える。言動はともあれ、彼女は決して記憶力に劣る妖怪ではない。覚えていないというのなら、事実そうなのか、嘘をついているかだ。

が、どうもルーミアの様子を見るに後者はあり得なさそうに思えた。もともと黒一色の着た切り雀、あまり身綺麗な妖怪ではないが、今夜はやけに薄汚れて見える。こししばらく、まともな食事をしていない証拠だ。

「最近、里に近づくと慧音に怒られるから行ってないんだよね。迷ってる人間もみつからないし」

夜中、人里の外を警戒もなくうろうろしているようなら、それは妖怪の犠牲になっても良い——彼女流に言うならば、食べても良い人間だ。ただの不注意か、やむにやまれぬ事情があったのか、いずれにせよ、人里に生まれ育った人間ならば、夜中無闇に出歩くようなら、妖怪に喰われるのは何回かに1回は必然的に起こる事故なのである。

ルーミアが犯人になるのは少なくともこれからだ。これまでの犠牲者は彼女によるものではない。

「そう、ありがとう。……これ、食べる？」

「わー」

すっかり野犬を平らげ、手指と口元の血を舐め取ってもなお、おなかに手を当ててひもじそうな表情をしていたのを見かねて、バスケットの底から食べかけのアップルパイを取り出す。なし崩しにお茶会から宴会に移行したため、食べそびれた分だ。

ルーミアはぱあっと顔を輝かせると、アップルパイを台紙ごとばりばりと噛みついてゆく。せめて切ってからにしろと言いたかったが、下手に手を出すと一緒に咬み千切られてしまいそうな気配を覚え、つい言葉がちこまってしまう。

直径15センチはあるパイは、わずか三口で彼女の胃袋に飲み込まれていった。

「ふー……」

シロップの付いた指先をべろべろと舐め、満足そうに眼を細

めるルーミア。単純な量で言えばあきらかに先程の犬の方が多くは、彼女が満腹感を覚える基準は、単に胃袋が物理的に満たされるかどうかとは異なっているらしい。恐怖以外に嗜好品でも腹を膨らませる妖怪というのなかなか珍らしいところではあるのだけど。

「ねえ、満腹ついでにもう一つ聞きたいんだけど」

「なに？」

「あなたのほかに、飢えている人食いの妖怪はいるかしら」

「えーと」

些か望み薄な質問ではあった。

彼女の知り合いと言えば、蛭と氷精、夜雀といったあたりか。蛭は基本的に水しか飲まず、妖精も人を喰うことはない。夜雀はと言えば最近八つ目鰻の商売にすっかり執心で、これまた人を襲うことは考えにくい。

ルーミアが同類を庇うことはないだろうが、もし知っているならそいつは、毎夜人里の娘を襲っている犯人である。先程のやり取りでルーミアが人里に近づいていないことが分かっている以上、無意味なものだ。

けれど、ルーミアは名残惜しげにパイの入っていた紙箱を齧りながら。

「そう言えば、墓場に新しく住み着いたやつがいたような気がするな」

などと、思いのほか有力な手掛かりを示してくれた。



墓地は酷く冷え込んでいた。

立ち並ぶ石の墓標は、風雨に削られてなお、四角四面の堅固な輪郭を保って並んでいる。墓石達は秩序立って整列しているのかと思えば前触れなく蛇行し、配列を乱す。

夜闇と肌寒い霧の奥に、無数の墓石の黒い影がぼやけて消えてゆく。静寂の奥には、いつしか生死の境界すら曖昧に霞ませているようだった。

命蓮寺の裏手に広がる、広大な石碑の群れ——墓場、と聞いてまず最初に思い浮かぶのはここだ。しかしこの墓標群がいつからここにあったのかを知る者は少なかった。

妖怪寺の化主である聖白蓮がしれっと自分の領地のように扱い、公式に否定する事もないため誤解が蔓延（はびこ）っているが、ここは命蓮寺の檀家の墓ではない。

元は、里の西で野辺焼きにされ、跡は朽ちるままにされていた遺骨を、そのままでは忍びないと思った誰かが建てた墓だっ



たらしい。それに他の誰かが倣い、あとはそれが繰り返されたのだ。

人妖平等を唱える仏門一派が地底の底から蘇るまでは、仏の教えは知識、形式程度でしか知られていなかったという。誰が教え広めるでもなく、数えるのも嫌になるほどの墓標の群れが出来上がったというのだから、これも立派な異変なのではないかとも思う。真面目に考えてこれだけの数の死者が里から出ていくというのは少々――いや、明らかに計算が合わない気がするが、きつと深く考えてはならないのだろう。

いずれにせよ、この墓地が死者の領土として一つの勢力となり、冥界にも決して引けを取らない死体達の都となつていいることは事実で。それをしゃあしゃあと自分の支配地域に組み込んでいる白蓮のしたたかさは大したものだと言える。現世欲望の一切を捨て、滅私救済に尽くしているような済ました顔をして、彼女は誰よりも魔法使いとしての欲望を捨てていない。

「お誂え向き過ぎるわね」

背中をひやりと撫でる冷たい気配を覚え、呟いた。

魔法使いであれば現世以外のものにも敏感であるのは当然のことで、私は墓地のそここに満ちるこの世ならざる者たちの存在を明瞭に感じ取ることができた。星幽体アストラルの手足が生者を羨むように私の手足を掴み、地面の中へと引きずり落そうとしてくる。

しかし生憎とこの身体は既に食を捨て虫を捨てた、生命の残渣のような肉体である。人の形こそ保っているが、人形と変わることのない、いわば魔法の入れ物だ。彼等が奪い取ったところで、生前の欲求を叶える事は一つも適わないだろう。

種族魔法使いが輪廻に留まっているのかというのは、かねてからの疑問の一つなのだが――今ここで試してやる気にはなれない。

浅ましく生への執着に蠢く幽霊たちが絡みつくのに任せ、墓地を進んでゆくと――やがて行く手に小さな炎が灯る。鼻をくすぐる匂いは、人の燐が焼けるものだすぐに分かった。

地底の火車猫がよく使っていた焔だが、今回のこれは何かに使役されている様子がなかった。無尽蔵に灯る青白い炎は、ただざわめき暴れ、蠢いている。

「……………」

近くに住まいを構えるものにしてみれば（勝手にそのあたりを漂っている事を、ねぐさと読んでいいのかは議論の余地があるが）この墓地に昨日まで見慣れない顔がいる事は日常茶飯事であり、また彼等がふとした拍子にいなくなっている事もこれまで朝が来て夜が来るのと同じくらい当然のことであるらしい。

彼等の中には明らかに生前の想いを募らせ過ぎて自縛したり怨念を溢れさせる凶悪なものがいたが、人間救済と同じくらいに妖怪救済も掲げる白蓮は、それを積極的に祓うようなことは

していないという。

「……近い、かしら」

墓地には死臭が満ちていた。もともと死体が眠る場所だ。死の匂いなどあつて当然だが、それを差し引いてもここは少しそれが濃すぎる。まるでたつたいま、ここで誰かが死んで朽ちてゆく最中だとも言つうような、霊廟には程遠い、生々しい死の存在感。

それは比喩でもなんでもなく、事実としてそうなのだろう。

この環境で、脛に傷を持つ妖怪達がここに逃げ込まない筈がないのだ。成程、そこらで群れている雑魚妖精よりも少しましな程度に頭のまわる妖怪ならばここは体の良い隠れ蓑となるだろう。この胡乱極まりない墓所は、妖怪救済を掲げる白蓮ですら、表から尋ねる事も躊躇うような後ろ暗い妖生を送る妖怪達、格好の居場所なのだ。

警戒のために展開していた感知人形が警告を発する。それとほぼ同時、右へ飛んだ私の横で、巨大な墓石が冗談のように粉砕された。

「おー？」

篝火が大きく燃え上がり、火花を散らして弾け散る。反撃に投擲した人形達の斧が、がきんと受け止められて宙を踊った。

「誰だあー、お前はあー!?」

大人しく事を納めようとする気などまるでないとはかりに、

大音声で誰何してくる動く死体。あるいはそこまで回る脳もないのか、腐っているのか。濁った眼を大きく見開き、ぞろりと牙の生え揃った口を大きく開けて笑う様子は、少しばかり可愛らしくもあつた。

宮古芳香。

忠実な死体は、その二つ名の通り、そこに居た。

「――ポランティアの魔法使いよ。ここに住んでる妖怪に用があつて来たの」

彼女の登場で九分九厘、目的は達成できたようなものだったが――まだ詰めを急ぐには早い。おおよそ隠し事や腹芸には無縁そうな相手なのはどう見ても明らかだが、わずかな誤謬、些細な思い違いが残っている可能性だけは否定しないでおく。

「この妖怪？」

身体を前に向けたまま、器用に首だけを――手足が動かないのにそこは自由なのか、右回りにぐるりと180度回し、さらに左回りにも同じことをして、彼女は額の符の【?】の文字と共に首を傾ける。

「あなたのことよ」

あまり複雑な事ができないだろう彼女の頭にあわせて、こちららも腹芸は止め、素直に切り出した。単純馬鹿相手に思考を巡らせ過ぎると墓穴を掘る羽目になることは、痛々しい記憶と共に経験済みだ。

「私は、お前を知らないぞー?」

完璧に忘れられているようだった。以前の面識があったとして、きちんと識別できるのかは果てしなく怪しいものだが。

「ここに立ち入る者は何人も許さん!! そうだ、私はここを守るのだ!! お前は誰だー!? 近寄るなー!!」

ぶんぶんと、腕を交互に振り回して威嚇してくる屍人形。

まっとうに会話も繋がらない。三歩前どころか直前のことも覚えていない様子だった。鳥頭よりも性質が悪い、いや、ある意味では都合が良いのだろうか。

色々と諦めながら、再度問いかける。

「ええ。でもあなたには聞きたいことがあるの」

「私があ、何かをしたのかー?」

「あなた、里の人間を食べてないかしら」

我ながら台詞の芸のなさに辟易としつつ、単刀直入に訊ねた。

「おお……?」

彼女は表情を強張らせ、視線をピタリと宙空へと定めた。残りわずかな脳を探り当てるように、じつと言葉を切つて、ふらふらと定まらずに漂っていた身体も静止させて、一心不乱に記憶を手繰っているのだろう。

「ああ……そんな事もしたような、気がするなあー」

「……そう」

九分九厘の予想は、実につまらない正鵠を射ていたらしい。

「大した理由にはならないけど、それは残念ね」

符を示し、戦操「ドルズウオー」を宣言した。

手元に人形を繰り出し、戦列を作る。

右に三、左に三、正面に二、背後に二。剣に楯に、槍に斧に。

銘々の得物を構えた人形達が、私の魔力糸による命令伝達を受け取って宙を走った。直撃の寸前に構えた騎士槍の表面に鈍い黒の液体が塗布され、武器が銀の輝きを帯びる。

屍被いの速成の銀鍍金だ。魔力付与の施された模造銀の騎士槍が束ねられ、屍人形を串刺しにする。

「お、あ」

まず両の腿を槍が貫き、次に腹を剣が薙ぐ。わずかの間をおいて胸に深々と斧の刃が埋まり、肩と肘を戦鎚が砕く。

半開きの頬を真横から槍の穂先に貫かれ、投擲斧で頭蓋骨を半分割られて、死体人形はだらしなく唾液と腐汁を撒き散らす。が、銀の霊力にじゅうじゅうと不死の身体を焼かれながらも、彼女は動きを止めなかった。串刺しにされた腕が引き千切れるにも構わずに身体をよじり、深々と食い込んだ両手剣が胴体を寸断する事にも躊躇せずに背中を反らして、喉を震わせ、獣のような咆哮を上げる。

「がお、あ、」

ぱきりと鈍い音が響いた。鍍金の銀に喉を焼かれながら、屍は銀槍を噛み千切り始めたのだ。ぱり、ぱり、ぞぶり。尖った

金属片が口を引き裂くのをものともせず、口に突っ込まれた槍を喰らつて咀嚼し、ごくりと飲み込む。

「不味い……」

ぶはあ、と死臭と鋼鉄の臭いの混じつたげつぷを吐いて、彼女は喉奥で唸つた。ぞわぞわと墓標の周囲に漂う鬼火が揺れる。不満げに唇を歪めた彼女は胃の腑が見えるのじゃないかと思う。くらいの大口を開けて、

「うーおーおーおーおーおーおーおッ!!！」

一声吐き出すと、凄まじい勢いで辺りの霊を吸いこみ始めた。その風圧といったらちよつとした風のように。私は人形にそれぞれの武器を地面や墓石に食い込ませ、引きずり込まれるのを塞がなければならなかった。

平たい胸が風船のようにばんばんになるまで、辺りに漂っていた浮遊霊をこっそりと飲み込んで、ばりばり、むしゃむしゃ、ぐちゃぐちゃ。槍傷で切り裂かれ倍ほどに大きくなつてしまつた口で思うさまそれを嘔み碎き、嘔み碎き、嘔み碎き——ごく

「……」

半死くらいまで目減りしていた彼女の肉体が、重傷あたりまで回復する。完全回復とはとても言えないが、あれだけの短時間での再生能力としては破格の能力だ。それでも彼女は肘から下がぶらぶらと揺れる腿で繋がっただけの右腕と、太腿の根元

から千切れた右脚に不満げだった。

悪食なんて表現で済まされるレベルではない。外部から栄養を取り込んで己を強化する妖怪は多々いるが、ここまで即効性と高効率の存在は見たことがない。

妖精は死んだところでただの『一回休み』であり、吸血鬼は賽の目に刻まれても数秒ですぐ復活するが、あれは彼女達の本質が肉体ではないためだ。その本質である自然や血の流れを害されれば無事では済まないし、何百回何千回と蘇生していれば再生間隔も延び、最後には力も尽きるだろう。

なんとという生命力——いや、死んでいるのだからこの表現は不適当か。ともかく彼女はぐるぐると喉奥で唸りながら、距離を取って取り囲む人達に向けてがちんがちんと牙を剥き、威嚇を繰り返す。

「うおー!! 卑怯だぞー!! 食わせろー!!」

先程の強引な再生で、周囲の霊体が殆ど喰われたのが幸いだった。これだけ陰気が満ちていればほどなく浮遊霊も集まってくるだろうが、少なくともいまの食べ残し程度では、全快とはいかないはずだった。

キョンシーは人形達の挑発に乗つて、後ろにねじ折れた脚が千切れるのにも構わず、強引に踏み込んで両手を振るう。さして強靱とも見えなかつた細い腕が、背後の墓石を粉々に打ち碎く。大した馬鹿力だ。

「逃げーるーなあー!!」

無茶な事を叫びながら、彼女はスperlカードを宣言した。

——毒爪『ボイズンレイズ』

青黒い爪から瘴気が滲む。滴り落ちた紫と紺の濃い毒素が地面を焼いて腐らせる。

濃紺の毒素を撒き散らす爪が、私の喉元へ食い込ませんと振るわれる。屍人形の怪力で振るわれた爪先を、割り込ませた人形の盾が受け止める。曲面加工で刃筋を滑らせる丸盾の表面を、爪は容易くがりがりと削り取った。

銀鍍金をあつさりと剥離させた左右の毒爪が、盾の地金に深く食い込んだ。傷痕からはすぐに錆びが広がり、丸盾が焦げるように侵食されてゆく。

「邪魔だぞおーー!!」

阻む楯が無くなった事を勝機と見たか、屍人形は振り仰ぐようにもう一撃を繰り出した。孔の空いて使いものにならなくなった盾を放棄し、人形を身体ごと割り込ませる。身体で毒爪を受け止めた人形は、見る間にじゅうじゅうと腐り錆びて、元型を失っていった。

腐食は魔力糸を焼いて溶かし、私の腕にまで伝わってくる。慌てて接続を切る頃には、左翼の人形は3体とも動かなくなっていた。

戦力を喪って一気に左翼が瓦解し、戦線が維持できなくなる。

やむを得ず右翼と後方の3体を展開して、突撃重視に戦列を組み替えた。

屍体の類が毒を持つているのはままあることだが、彼女のそれは単純に身体的に害を与えるものというよりも、命数——生命そのものを害する毒だ。生命の熱量を奪い去る冷素を元にしたそれは、あらゆるものの腐食をもたらす死毒だった。

「おおお……」

毒爪の貫いた人形の欠片をばりばりと噛み砕く彼女の周囲で、さらに気温が低下し、還元された質量がわずかながらにキョーシンの四肢を再生させる。

「避けーるーなあー!!」

叫び、力任せに振り回された腕が、墓石を打ち砕き、なぎ倒す。人の身体などあつさりちぎり取ってしまう馬鹿げた臂力だ。見た目以上の脅威だった。

長期戦は損耗を強いられると判断する。人形の修復に必要な資材がすっかり乏しくなっている状況で、それは避けたかった。(——仕方ないわね)

墓石の陰を縫って回避行動をとりながら、人形の制御に使う魔力糸を切り離す。遠隔操作に切り替わった人形達が宙を奔り、それぞれが虹色の光線を彼女に撃ち込んでゆく。

「そんなの、効かないぞおーー!!」

四方からの光線を浴びてなお、尋常ではない耐久力を見せる

屍人形。だが、虹色の光線は直接射撃による攻撃力というよりも、目標との距離を測る索敵線のようなものだ。地面を跳ねて避けようとする彼女を的確にとらえ、包囲を敷いて追い詰め追った人形達が銀槍を振りかぶる。

「うおおー！！」

キョンシーは吼えるように叫んで、それを迎撃した。両手の爪でそれぞれ1体。さらに大きく開いた口で直接もう1体、3体の人形をがきんと咬み止めて、ぎろりとこちらを見上げる。

長い牙を覗かせ、にいと口元を緩ませる死体を見て、私は符名を宣言する。

これで、詰みだ。

「――魔符『アーティフルサクリフェイス』」

「うお？」

間の抜けた声が、立て続けに爆ぜる轟音と閃光に飲み込まれてゆく。人形達の自爆がもたらした霊撃の連鎖爆発が、周囲に漂う雑多な浮遊霊もまとめて吹き散らした。

爆発の後には、墓石を薙ぎ倒す大きなクレーターと、爆心地は地面が融解し、じゅうじゅうとい黒い煙を棚引かせていた。

このスペルは人形内部に仕込んだ火薬を用いた、破壊力重視の特殊霊撃だ。わざわざ魔法のために火薬を仕込む理由は二つあり、一つは爆発の威力を類感させて霊撃の威力を上げるため。もう一つは、魔法の効きにくい相手を直接吹き飛ばすためだ。

魔法と物理、両方の爆発の中、四肢をもぎ取られて宙を舞った屍人形が、どざりと地面に落ちる。火傷というよりは腐肉の焦げた消し炭のような有様。顔の半分ほどは焼け、額を覆う符も半ばから千切れ落ちていた。

が。

「びっくりしたなあ……」

下半身を失ってなお、屍人形は動作を停止していなかった。

「他に言うことはないのかしら。正直そのリアクションは少し傷付くんだけだ」

切り札の一つのつもりが、彼女には決め手には至っていないかったらしい。無事な方の半分顔をみるに、咄嗟に人形を吐き捨てて、脳や背骨と言った中枢部への損害を避けたのだろう。

肉体の損傷は彼女にとって文字通り痛痒を与えない。と言って、屍人形の単純な精神構造は、心へのダメージも受け付けないだろう。その上放置していれば勝手に再生する。身体が粉々にでもならなければ大半の攻撃手段が意味を成さないのだから、私の戦種とは相性が悪いと言えた。

私が舌打ちと共に手詰まりを感じ、次の手を模索している時。

「――お待ちくださいな」

不意に、あたりに甘い香りが満ちる。

「この子は大事な大事な私のキョンシーなのですから。壊してもらっては困ります」

澱んで濁った気配と共に、耳奥で反響する囁きが紡がれる。精神を直接侵すような不快な声に、私は眉を跳ねさせた。

慌てて口元を覆う。この甘ったるい匂いは、精神を蝕む丹葉香だ。

立ち並ぶ墓石のぼんやりとした霞の奥、袋小路のはずの壁の奥から、するりと進み出る姿があった。

途端に濃くなる、強い死臭と澱む濁業。

「うおー!! セーが様ー!!」

現れた乱入者の元へ、キョンシーはすりずりと地面を這いつて近寄ってゆく。

「ヘンな奴が来たけど、私は負けなかったぞー!!」

「よしよし。いい子いい子。すぐに直してあげるからね」

結い上げた髪を傾け、上半身だけになった死体を抱え上げる彼女。額を撫でられてキョンシーは嬉しそうに喉を鳴らした。

「……あなたが彼女の主人で良いのかしら」

「ええ。……霍青娥と申します」

名乗りから見ても大陸の——それもかなり古い妖怪であると知れた。全身の気脈も濃み、従者同様、生きているのか死んでいるのかも判然としない。

そも、墓場に動く死体がいることは決して可笑しくはないのだが、彼女の纏う気配は並の死体のそれではない。階梯で言うならば第五階梯以上。

尸解仙。それも、大道たる定めを無視し、戒律を破ることで生命を長らえ力を得る、邪仙だ。屍体を動かすとなると、八大洞なら召鬼の系統だろうか。

「あなたが森の人形遣いさんね? ——観たところ、あなたも決して仙道と無関係ではなさそうだけれど?」

「魔法も仙道も、極めつく先は同じものよ」

私の使う人形を媒介した魔法は、類感と感染の呪術原理に基づく。いつだったか藁人形について新聞屋に話したように、形の似ているもの同士は関連性を持つという原理と、一つのものから分かれたものは、離れていても繋がっているという原理だ。

藁人形の呪詛で言うなら、藁束で呪う相手の姿を模して人形を作るのが類感で、藁の中に呪う相手の髪の毛や持ち物を混ぜるのが感染にあたる。比喩にするのもどうかと思うが、女性の下着や靴下に執着する偏執的性癖もある意味で感染魔術と言えないこともない。

捨食捨虫の魔法も、食を断ち霞を食べるという仙人の生活や、三戸の虫を祓うことと同義で、彼女からしてみれば人間から転化した種族魔法使いもまた仙人と似たようなものなのだろう。

「……お名前を窺ってもよろしいですか?」

「アリスよ」

私が名を告げると、彼女はまた小さく微笑む。

「そう、アリスさん。……このたびは芳香が大変お世話になりました」

胸に抱きかかえた屍人形に愛おしげに頬ずりをして、青娥はくすぐすと目を細める。その胸の中で童子のように笑うキョンシーが、嬉しそうに牙を覗かせる。

ずるりと――背後で、不快な音が、響く。

「この子が、どうしてもあなたにお礼をしてあげたいというもので、すから」

ああ。迂闊にも――私にはこの時既に、そこにあるものの正体も、事件の真相も、予想は付いていたのに。

振り返って、しまった。

墓場のそこから、這い寄るように姿を現す、死体が5つ。

食い千切られた身体を引きずるようにしてなおも動く、土気色の死体達。

「受け取って、頂けますか？ 物納、と言う形になつてしまい、ましたけれど、ね」

極上の笑顔と共に。青娥は、人里で犠牲になつた娘達の死体を示してみせる。

私が、周囲に残る人形たちを残らずそこへ放ち、自爆を命じたのはその直後だった。

――魔操『リターンイナニメイトス』。

轟音が、真昼のように墓地を照らす。揺れ動く影は崩れ落ち

た墓石を舐め、燃え上がる炎と立ち昇る黒煙をたなびかせる。燃え焦げてゆく墓地の一角に視線を向け、唇を嚙む。

「あらあら……お気に召しませんでしたか？」

「……ええ。最悪の気分」

唾を吐き捨てたいのを堪えつつ、青娥に背中を向けたまま答える。私はようやく自分の詰まらない勘違いと、事件の概要を掴んでいた。

人里の犠牲者たちは、食べ残しではない。私に恩義を感じた屍人形が、その恩に報いようと、人形の材料を集めて回った余りなのだ。

「……ボランティアもほどほどにして欲しいわ。次からは修繕費用を請求するわよ」

私は、そんなもののために義憤に駆られていたことになる。何とも馬鹿馬鹿しい結末に苦笑が漏れる。

「ひとつ、聞いてもいいかしら」

「ええ、なんなりと」

「どうして、態々遊郭の娘ばかりを襲わせたの？」

確かに夜の夜中に歩いている娘を狙うのならば領ける標的だが、片手では足りない数の犠牲者を彼女達だけに限定してやる必要はなかったはずだ。



死体人形を繕う仕組みや理論までは知らないが、生娘の身体では都合が悪いということもないだろうし。

「だって」

可笑しそうに彼女は微笑む。胸に抱いた屍人形を、手際よく繕いながら、愛おしげに、自分の娘を慈しむようにその頭を撫でる。

「それなら怒るのはお門違いじゃありませんか。彼女たちには商売してもらっただけです」

「商売？」

意味が分からず、瞬きをした私に。青娥は楽しくて仕方がないというように、先を続けた。

「娼婦というのは、身体を売ってお金を稼ぐものでしょう？」

「——ああ。」

間違いない。私が言うのもなんだが、こいつは飛び切りだ。

善悪どころか、目的と手段にも頓着がない。

「皆さんには十分なお代を支払っておいたつもりなのですけれどね？」

何が悪いのか分からないと言うように、邪仙は首を傾げた。

彼女が重視するのは何よりも自身の欲だ。欲望のままに惨劇を起こし、濁業を積む事を至上とする。

そも、ただ単に使役するだけならば、材料に死体を用いる意義は薄い。もともと人間であつたことが有利に働く面はあれど、

兵衛<sup>ゴリム</sup>として見れば人体は実に脆弱だ。人間を模して動き戦うなら、容易に作成できる木や紙でいいし、頑健さを求めるなら石や鉄を、採算を度外視してでも強力な護衛を求めるなら精霊<sup>ミスマリ</sup>銀や樹鉄鋼<sup>ブスチル</sup>を選べばいい。人としての情や業を持つ死体など、扱いにくいことこの上ないものだ。

なにより、無生物から作る兵衛<sup>ゴリム</sup>は、欲を持たず、人を喰うこともない。

だが、彼女にとつては——作製にも維持にも、できるだけ多くの犠牲者を強いる屍人形こそが、もつとも最良の従者なのだ。その破綻した合理性は、成程、邪仙として称賛されるほどに立派なものなのだろう。

彼女は袖で覆った口元をゆるめながら、地面に散らばる人形達の残骸を見下ろす。ふわりと辺りには甘ったるい丹香の匂いが満ち、私の神経をささくれ立たせた。

「あなたも、折角作つた人形でしょ。もう少し、大切にしておあげたら良いのじゃないかしら？」

「仙人が、人形一つに執着していることの方が滑稽よ。物欲なんて一番最初に捨てるものでしょう」

「生憎と、大道に背く左道使いですので——芳香」

「任せろ、ご主人様!!」

見事な手際で死体人形の応急修復を終えた邪仙が、その背中をポンと叩く。キョンシーは背中で跳ね跳ぶように立ちあがり、

声を張り上げた。

「我々は、最後の一兵となろうとも、ご主人様を守る崇高な使命のために戦うのだー!! さあ死ぬがよい! 異教の邪悪な魔法使いめー!!」

接ぎ合わされたばかりの足が軋むのにも構わず、屍が頭から突っ込んでくる。キョンシーは肘から先の無い手の代わりに、がぱりと開けた大口で人形に噛み付いた。

爪だけでなく牙や唾液からも毒素は分泌できるのか、腐臭を吐き散らしながら武器ごとばりばりと人形を噛み砕きながら、ざろりと瞳孔を濁らせた眼で私を睨む。

「っ」

食欲を隠すことなく牙の並んだ大口を開けるキョンシーへ、オルレアンの騎士人形を展開。魔力糸に絶対死守の命令を流し、戦線を構築させる。

「うおー!! またお前らかあー!!」

腕の無い身体をものともせず、剣を噛み止め盾を砕くキョンシーは、先程までよりも遥かに力を増していた。最も近接戦に優れるはずの騎士人形はたちまち打ち合った剣を砕かれ、鎧にいくつもの傷を負う。キョンシーは主の危急にこそその真価を発揮するのだ。

聖別した武具をも溶かし腐らせる死毒を撒き散らし、屍人形がじりじりと迫ってくる。自律稼働では凌ぎ切れないキョンシ

ーの猛攻に、私は防衛の命令を打ちこむので手一杯となり、否応なしに邪仙との距離を引き離されてゆく。

「うふふ。何もかも一人でというのは大変ですね」

そう囁いた邪仙が、袖を手繰った。

――邪符『ヤンシャオグイ』。

「――瘟」

鼓膜を震わせる不快な口訣と共に、彼女の袖から青白い輝きの光球が飛び出した。

おぞましい符名が術の体を表していた。養小鬼……つまり墮胎した胎児の帰巢本能を用いた術だ。産まれ落ちることが出来なかった怨念を増幅された屍鬼は、再び産まれ直すため、暖かい胎を求めて追い縋り、潜り込もうとする性質を持つ。

おおよそ、少女達の遊戯である弾幕ごっこにおいて、最低劣悪のスペルカードだ。

「……最悪の趣味ね」

「お褒めに預かり光栄ですわ」

ぼんやりと輝きを放つ光弾の中央に陣取る青白い小鬼達が、膜の掛かった眼で一斉にこちらを見る。

不快感に歯を軋らせ、私は足元に這い寄ろうと近づくと、彼等、人形弓隊を繰り出して斉射を浴びせた。

「あらあら……乱暴しないであげてくださいな。その子たちは寂しがってるだけですよ?」

「五月蠅いッ」

が、銀合金の鏃に射抜かれてなお、小鬼達は不規則な軌道を取りながら蠢き、動きを止めない。それどころか——彼等は、近くの人形に手当たりしだいに取りついてスカートを食い破り、胎に潜り込もうとさえしていた。

……断言してもいい。今この瞬間以上に、人形たちを少女の姿で作ったことを悔いる日は、来ないだろう。

「つぎ、けッ」

感情が自制を外れ、叫びとなって迸る。

戦列に加わっていた人形達のうち、二体が符の指名を受けて動作を止める。同時に他の人形と同サイズにまで折り畳まれていた質量が展開。わずか一秒半で身長4mの巨人へと変じた人形達が、私の前へと踊り出た。

凌辱を続ける小鬼達、騎士人形と交戦していたキョンシーと、邪仙を直線状の射線へ捉え、極大の閃光が撃ち放たれる。

——試験中「レベルティーターニア」

魔理沙のマスタースパーク級とまではいかないが、それに準じた出力の自負がある。ただ徒に破壊を撒き散らすだけの、威力の大きすぎる未完成なスペルだが——今は、それがありがたく思えた。

轟音をとどろかせ、大気を弾く光熱波が墓地を穿ち貫いてゆく。感情と共に魔力を絞り出した私が大きく息をつきながら、額に汗を感じていた。深く抉れた地面は熱量に溶け、高熱を放ちながら陶器のように表面をガラス化させている。

もうもうと立ち込める土煙の中、見えたのは。身を挺して主を庇ったキョンシーの姿。

全身を焼け焦げさせてなお、主の前に立ちはたかり、ありつたけの冷素<sup>フリオースレ</sup>を放射して閃光の熱量から主を守ったのだろう。

「お……せーが、さま」

「あらあら……酷い怪我ね、芳香」

騎士人形の剣を胸に受けたまま、濁った瞳で主を見上げ、ごぼりと濁った血を吐くキョンシー。

「いいいいいこ。偉いわ」

そつと頭を撫でられ、キョンシーは笑ったように見えた。しかしそんな健気な従者をあつさりと投げ捨て、邪仙はずぷりと地面の中に身体を滑り込ませる。

逃げられると気づくのに、数瞬を要した。

その頃にはもう、青娥の姿は胸辺りまで地面へと沈み——

「うふふ。アリスさん。どうも御気分がすぐれないご様子です  
ので、本日はお暇させて頂きますね」

「待——ッ」

繰り出した人形の槍が貫くよりも速く、邪仙の姿は地の底に

消えていた。

「またお会いいたしましょう。芳香とあなたは仙縁があるようですし。大道の定めは覆せないものですから」

わんわんと、地の底を揺らし、あたりに反響する耳障りな声。

あとには残された死体の燻ぶる腐臭と、丹葉の甘い残り香だけが漂っていた。



「んう……？」

目を覚ますなり、びんと上体をバネ仕掛けのように跳ねあがらせて、芳香は起き上がる。

「お？」

「……起きた？」

寝惚けているのだろうか、左右に首を捻り、キョーンシーはあたりを見回して、最後に私を見上げる。そして彼女は梟のように首をかしげ、おもむろに額の符に【！】の文字を浮かばせた。

「思い出したぞー!! お前、森の人形遣いかー!!」

先程思い切り頭を戦鎚でぶち抜いた時、記憶の配線がうまい

具合に繋がったのだろうか。代わりに、さつきまでの交戦の記憶はすべて吹き飛んでしまっているようだった。

「おお。この間アリスには世話になったからな! お礼をしないといけないなあー!!」

「結構よ。もう十分」

うんざりと呟く。彼女は振り回している自分の腕が、どうして繋がっているのかも疑問を持たないようだった。さつきまで自分のものではなかった手足を振り回し、口元に牙を覗かせて、無邪気に屍人形が笑う。

「……ねえ、あなた、幸せ？」

「おお、しあわせだぞー!! ゾンビは永久に不滅だから!!」  
問いかけた私に、満面の笑顔で、彼女は答えた。

(了)

## 【あとがき】

はじめまして、あるいはお久しぶりです。

折葉坂三番地の銅おりはと申します。

このたびはお手に取っていただきありがとうございます。

この本、『フランケンシュタイン・ネクロニカ』は、アリスと芳香

青娥娘々の出会いを軸に、人形遣いアリスが人形に対するスタンスなんかについて書いた、当サークル十七冊目のSS本となります。アリス本と言いつつ実質は芳香本な気がしなくもありません。

死体やら呪いやら、普段よりも割とグロテスクかつダークな描写が多くなっております、好みの分かれる展開になっているかと思えます。御不快にさせてしまった方にはお詫びいたします。

また、もう死んでるからって好き放題にボロボロにしちゃった芳香ちゃん、悪役になりすぎちゃった娘々のファンの皆様には大変申し訳ありません。

でもヤンシャオグイは色々言い訳できないと思ひました。

ええと、謝ると言えば作中の元ネタについても触れておかないと。

『影技』で有名な岡田芽武さんがその昔、ドラゴンジュニア誌で連載していた『隴』と言う漫画がありまして。異世界と言つていい『大日本帝国』を舞台に人間ではない種族達が異能をもつて激しい戦いを繰り広げるお話なんです、作中ではその凄まじい戦闘描写と同時に、彼等の見せる善悪や倫理を完全に超越した言動が非常に印象的に描かれています。

作中の青娥さんのセリフのいくつかはそこからお借りしたものです。

今回、表紙には「四季悠々」さんのアリス立ち絵素材をお借りしました。御許可をいただいたこと、感謝いたします。

また、いつものように白身氏、Rizal氏には様々な形でお世話になりました。この場を借りてお礼をさせていただきます。

——それでは。

また次の機会にお会いできることを願つて。

## 【奥付】

「フランケンシュタイン・ネクロニカ」

平成23年12月30日 Co-

発行 折葉坂三番地 (<http://onhazakablog28.fc2.com/>)

著者 銅おりは

※本作は「上海アリス幻楽団」様の

「東方Project」の二次創作です。



*Death be not proud,  
though some have called thee  
Mighty and dreadful,  
for thou art not soe,*

*For, those whom thou  
think'st thou dost overthrow,  
Die not, poor death,  
nor yet thou canst thou kill mee*



東方project Fanbook 2011.12.30 折葉坂三番地

表紙イラスト：四季悠々

*One short sleepe past,  
wee wake eternally,  
And death shall be no more; death,  
thou shalt die.*